

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 11 日現在

機関番号：32403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370696

研究課題名(和文) 第二言語習得における筆記ランゲージングの効果とプロセスの解明

研究課題名(英文) The effects of written languaging on L2 learning

研究代表者

石川 正子 (Ishikawa, Masako)

城西大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：10552961

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：「ランゲージング」とは外国語学習者が疑問に感じたことや自らの言語使用を振り返る際に、それらについて話したり書いたりすることで、これまで口頭ランゲージングの学習促進効果が多数報告されている。本研究ではその筆記版(筆記ランゲージング：WL)に焦点を当て日本人大学生を対象に2回の実験を行ったところ、両実験の英訳テストで筆記ランゲージングの学習促進効果が確認された。この結果は、ランゲージングは口頭だけではなく、筆記にも学習効果があることを示している。

研究成果の概要(英文)：“Languaging” is language produced by learners when they encounter linguistic problems or reflect on their language use. To date, many studies have reported the facilitative effect of oral languaging on language learning. Focusing on written languaging, this study investigated its effect with Japanese university students as participants by conducting the two experiments, both of which produced evidence that written languaging has a positive impact on Japanese-English translation tasks. These results indicate that not only oral languaging but also written languaging facilitates language learning.

研究分野：第二言語習得

キーワード：外国語教育 第二言語習得 ライティング

1. 研究開始当初の背景

これまでの外国語（第二言語）教育研究から外国語習得のためには、インプット（聞くこと・読むこと）のみならず、アウトプット（書くこと・話すこと）が重要であることが明らかになっている（Izumi, 2002: *Studies in Second Language Acquisition*）。近年の新しい動向として、学習者がインプットやアウトプット課題に取り組む際、考えたことや疑問に感じたことについて言葉にする「ランゲージング（*languaging*）」という活動が学習効果を高めることが徐々に分かりつつある（Swain, Lapkin, Knouzi, Suzuki, & Brooks, 2009: *Modern Language Journal*; Swain, 2010: *Talking it through: Languaging as a source of learning*）。しかし、これまでの研究はペアで文法ルールについて話し合ったりする口頭ランゲージングがほとんどで（Storch, 2008: *Language Awareness*; Swain & Lapkin, 1998: *Modern Language Journal*）。その筆記版、つまり自分の考えや疑問について考えを書き表す「**筆記ランゲージング**」の効果を検証した研究は国内外を含め、本研究代表者・分担者が行ってきた2つのみであった（Ishikawa, 2013: *Language Awareness*; Suzuki, 2012: *Language Learning*）。これらの研究では筆記ランゲージングが第二言語習得に肯定的な影響を与える可能性が示唆されたものの、統制群が無い等実験上の問題が指摘されていた。

2. 研究の目的

上記の背景から、本研究では統制群を加え、筆記ランゲージングの効果を検証し、研究成果を発展させ広く一般化することを目的として以下の研究課題に取り組んだ。

筆記ランゲージングは第二言語習得を促進するのか？

その場合、筆記ランゲージングは他の課題（文法練習など）よりも効果があるのか？

3. 研究の方法

筆記ランゲージング学習促進効果を、事前テスト・処遇・事後テストのパラダイムで検証した。実験は2回行った。それぞれの概要と結果は以下の通りである。

(1) 実験1（2013年度後期実施）

参加者

関東の私立大学で3つの英語クラスに在籍していた1年生40名。

実験方法（手続き・実験材料）

各クラスを筆記ランゲージング（*written languaging: WL*）有群（17名）・無群（16名）・比較群（7名）に振り分け、仮定法過去を目標言語項目として実験を行った。また、事前・事後テストでは文法テストと英訳テストの2つを実施した。文法テストは多肢選択式の仮定法過去に関する10問とディストラクター5問の計15問、一方、英訳テストは仮定法過去に関する文5問とディストラクター2問の計7問で構成されていた。

第1週目に、3群に事前テスト（文法テストと英訳テスト）を実施した。

第2週目にWL有群・無群は仮定法の説明文を読んだ後、それぞれの課題に取り組んだ。WL有群は読んだ内容を理解していることが教師に伝わるよう配布された用紙に仮定法のルールについての説明を書いた（筆記ランゲージング）。この間、WL無群は仮定法過去に関する文法問題に取り組んだ。両群ともそれぞれの課題中には説明文を参照していない。課題後、両群に直後テスト（文法テストと英訳テスト）を実施し、比較群は直後テストのみに取り組んだ。

第3週目には全群を対象に遅延テスト（文法テストと英訳テスト）を実施した。

分析方法

文法テストは仮定法過去に関する10問

に、それぞれ if 節・主節 1 点ずつ 2 点を配点し、ディストラクター 5 問は分析対象にできなかった。英訳テストも仮定法過去に関する文 5 問に関して、if 節・主節それぞれで動詞・助動詞の時制などを得点化の対象とし、ディストラクター 2 問は分析対象に含まなかった。

それぞれのテストの結果について分散分析を行い、ランゲージングが目標言語項目の学習に及ぼす効果を測定した。

結果

事前テスト（文法テストと英訳テスト）に関して分散分析を行ったところ、3 群間に有意な差は認められなかった ($F(2, 38) = .71, p = .50, F(2, 38) = .51, p = .61$)。

直後テスト（文法テストと英訳テスト）に関して分散分析を行ったところ、文法テストに関しては 3 群間に優位な差があるが ($F(2,38) = 10.23, p < .01$)、英訳テストには見られなかった ($F(2,38) = 2.16, p = .13$)。多重比較の結果、文法テストに関しては、WL 有群と比較群、WL 無群と比較群の間にのみ有意な差が見られた。

遅延テストに関しても分散分析を行ったところ、文法テストと英訳テストの両方で 3 群間に優位な差が見られた ($F(2, 38) = 8.55, p < .01, F(2, 38) = 5.37, p < .01$)。多重比較の結果、文法テストにおいては、WL 有群と比較群、WL 無群と比較群の間に有意な差が見られた。一方、英訳テストにおいては、WL 群と比較群の間にのみ有意な差が見られた。

主要な結果は、筆記ランゲージングには学習効果は認められる、直後テストにおいては筆記ランゲージと文法練習に差はない、遅延テストにおいては筆記ランゲージングが文法練習よりも高い効果がある、に要約できる。直後テストに差が出なかったのは、処遇直後にテストを実施したためであったと考えられる。遅延英訳テストで筆記ラ

ンゲージング群の効果が高いことは、筆記ランゲージングが第二言語学習を促進するという仮説を部分的に支持すると解釈できる。

(2) 実験 2 (2014 年度前期実施)

実験 1 では比較群に文法問題を課したが、実験 2 では筆記ランゲージングの効果をより良く検証するために「書く」という点で筆記ランゲージングと共通点のある筆写を比較群に課した。

参加者

関東の私立大学の 2 つの英語クラスに在籍していた 1 年生 42 名が実験に参加した。

実験方法

両クラスを WL 有群 (22 名)・無群 (20 名) に振り分け、実験 1 同様に仮定法過去を目標言語項目として実験を行った。

第 1 週目に、両群に事前テスト（文法テストと英訳テスト）を実施した。

第 2 週目に両群ともに仮定法の説明文を読んだ後、それぞれの課題に取り組んだ。WL 有群は中学生に仮定法の説明を求められたという設定で、仮定法について読んで理解した内容を与えられた用紙に説明文を見ずに書いて説明した (筆記ランゲージング)。一方、WL 無群は読んだ説明文の内容をよく考えて読み直しながら筆写した。その後、両群に直後テスト（文法テストと英訳テスト）を実施した。

第 3 週目には両群を対象に遅延テスト（文法テストと英訳テスト）を実施した。

分析方法

実験 1 で使用したテストに修正を加え、仮定法過去に関する同様の形式の 2 種類のテスト（多肢選択式の文法テストと英訳テスト）を用いて実験 1 と同様の方法でテスト結果の分析を行った。

結果

事前テストに関して分散分析を行ったところ、両群間に有意な差は認められなかった ($F(1, 41) = 2.86, p = .98, F(1, 41) = .00, p = .96$)。直後テストに関して共分散分析を行ったところ、英訳テストに関しては2群間に優位な差があるが ($F(1,41) = 5.20, p < .05$)、文法テストには見られなかった ($F(1,41) = .81, p = .37$)。遅延テストについても共分散分析を行ったところ、文法テストと英訳テストの両方で両群間に優位な差は見られなかった ($F(1, 41) = .13, p = .72 < .01, F(1, 41) = 2.78, p = .10$)。

主要な結果をまとめると、英訳テストにおいて、筆記ランゲージングが筆写よりも直後テストにおいてのみ高い効果がある、文法テストでは直後・遅延テストとも筆記ランゲージングと筆写に差はない、に要約できる。

直後英訳テストにおいて筆記ランゲージング群の得点が比較群よりも高かったことは、筆記ランゲージングの学習効果を示唆している。英訳テストのみで差が見られたことは文法テストに比べてより細かく中間言語を得点化したことの影響が考えられる。更に、両群の間に大きな差が出なかったのは、文法のルールを考えながら説明文を書き写すという筆写活動にも一種の筆記ランゲージング効果が有った可能性がある。

4. 研究成果

上記2つの実験から筆記ランゲージングには学習を促進する効果があることが明らかになった。この結果はこれまでの口頭ランゲージング研究 (Swain, 2010 のレビュー参照) や筆記ランゲージング研究 (Ishikawa, 2013; Suzuki, 2012) の結果とも一致しており、ランゲージングは口頭も筆記も含むという Swain (2006) の主張を証明することとなった。したがって、思考を口頭、筆記を問わず外在化することで、学習している言語項目への内在化が進むという学習プロセス解明への第

一步を踏み出したといえるであろう。しかし、ランゲージングの効果が多肢選択式文法テストでは見られないこと、参加者数が少ないことなどいくつかの問題点があり、今後の研究ではなぜテストによって差が生じたのか、学習者の適性や取り扱う文法項目などによって学習促進効果に差があるのかなど、更に取り組んでいかなければならない課題も浮上した。

実践的意義として、本研究は文法説明後に練習問題に取り組みさせるだけではなく、生徒自身に自分の言葉で文法について語らせる (書かせる) 機会を設けることの重要性を示唆している。授業内で、または宿題として、日記やポートフォリオなどにその日学んだことを書くことは生徒の学習にとって有効であるだけでなく、生徒の学習状況を把握し、自身の教授法を振り返ることを可能にするという点で教師にとっても有用な活動と考えられる。

5. 主な発表等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

Suzuki, W. (in press). The effect of quality of written languaging on second language learning. *Writing and Pedagogy*, 8(2). 査読有

鈴木 渉 (印刷中) 「社会文化的アプローチに基づく第二言語習得研究 - 最新の研究動向と教育的示唆 - 」『第二言語としての日本語習得研究』19号 査読無

Ishikawa, M., & Suzuki, W. (2016). The effect of written languaging on learning the hypothetical conditional in English. *System*, 58, 97-111. 査読有

鈴木 渉 (2016) 「教育実践に役立つ

第二言語習得研究 - インプット、インタラクション、アウトプットの観点から - 』『KELES Journal』第1号, 42 - 45 頁

〔学会発表〕(計 4 件)

鈴木 渉 『社会文化的アプローチ』第26回第二言語習得研究会全国大会 パネルディスカッション「様々なアプローチの第二言語習得研究 - 最新の研究動向と教育的示唆」東北大学 2015年12月19 - 20日

Ishikawa, M., & Suzuki, W. (2015). Written Linguaging and Learners' Knowledge of Grammar in Second Language: Two Empirical Studies. Second Language Research Forum (SLRF), Georgia State University, Atlanta, USA. October 29-31, 2015.

石川正子・鈴木 渉 (2015) 「文法習得における筆記ランゲージングの効果」第41回全国英語教育学会熊本研究大会 熊本学園大学 2015年8月22 - 23日

Ishikawa, M., & Suzuki, W. (2015). Does "Written Linguaging" Facilitate Learners' Knowledge of Grammar in Second Language? American Association of Applied Linguistics (AAAL), Fairmont Royal York, Toronto, Canada. March 21-24, 2015.

Suzuki, W. (2015). Linguaging and second language learning: Theory, Research and Pedagogy (Keynote speaker). TELLSI conference, Lorestan University, Khorramabad, Lorestan Province, Iran.

November 17-19, 2015.

石川正子・鈴木 渉 (2014) 「筆記ランゲージングの効果：文法説明の場合」第40回全国英語教育学会徳島研究大会 徳島大学 2014年8月9 - 10日

〔図書〕(計 1 件)

鈴木 渉(2016)『英語教育・応用言語学・心理言語学』中野弘三・服部義弘・小野隆啓・西原哲雄(編)「簡略英語学・言語学用語辞典」開拓社

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

石川 正子 (ISHIKAWA, Masako)
城西大学・公私立大学の部局等・准教授
研究者番号：10552961

(2)研究分担者

鈴木 渉 (SUZUKI, Wataru)
宮城教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：60549640